

【一宮館主賞】 城戸 夕三

清ちゃん、お元気ですか。

私は 今秋の雲の流れに昔を反芻しています。

「ランプの灯揺れて母いたサンマ焼く」これは私の句です。

私達はこんな時代から、人が月に旅する今を生きているのですね。

私達の両親は大正の始め頃

渡鮮して韓国の人達の手を借りながら農事を営んでいました。

南鮮の一角此の地で生まれ育った私達二人は従兄同士の

同年。

光と影のようにいつも一緒でしたね。

私達の仲にあなたのお兄さんが時折り茶々を入れました。

レンゲ草を繋いだ首輪を聴診器に医者になったり、

かくれんぼでは鬼のお兄さんに私達は放つとかれ、

倉庫の米俵の間に眠り込んで

夕暮れの中 大人たちを大騒ぎさせたのです。

そのお兄さんは努力、学業を積み、

医療医院を開設し自身の堅い約束を果たしたのです。

その後 私達は女学校へと自転車通学しました。

ポプラ並木道を抜け大川橋からの風景は四季折々のリズムが

ありました。

こんな静かな此の刻も遥か地平の果てでは日本の兵士は

戦いの火花を散らしていたのです。

陸海空の日毎のニュースに胸たぎらせて私達は慰問袋作り

町角では千人針を願い緊張と気魄の日々を送っていました。

そして、八月十五日 戦争は終わりました。

巷では兵士の帰りを待つ唄 ふるさとの唄が流れ国にも民にも

青春がよみがえりました。

時は過ぎ、私は本州、清ちゃんは天草と、

遠い便りとなりますけれど、心は思い出の七色の糸で

繋がりますね。

またお会いする日を楽しみにペンを置きます。

(千葉県／88歳／無職)

